

## 2) 昆虫類以外の無脊椎動物

### ①概説

選定にあたっては、1) 最新版の環境省レッドデータブックや環境省レッドリストに掲載されており青森県に分布すること、2) 青森県の個体群が生物学上重要であること、および、3) 希少性が高いことの3点を考慮して行った。青森県レッドリスト(2006改訂版)では、汽水域を新たに対象範囲に含めて選定種の見直しを行った結果、青森県レッドデータブック(2000)でリストした16種の2倍以上にあたる38種が選定された。青森県レッドリスト(2006改訂版)の公表と前後して、環境省のレッドリストは「陸・淡水産貝類」が2005年に、「甲殻類等」、「クモ形類・多足類等」が2006年に改訂された。今回の改訂では、上記選定基準の1)に照らして、1種(ヒトハリザトウムシ)を新たに追加した。青森県レッドデータブック(2000)で選定された種類については、近年新たな生息地が確認されたミズグモをDランクからBランクに変更した他、いずれもカテゴリーの変更はない。キタホウネンエビは日本固有種で、二か所しか知られていない記録のうち、下北半島の生息地では生息に不可欠な積雪が近年少なくなっており、絶滅のおそれが極めて高いと考えられる。

青森県レッドデータブック(2000)以降、新たに追加された種類は23種である。ニホンザリガニの外部共生者である環形動物門のヒルミズ類2種は、どちらも分布がほぼ青森県に限られている。特に、ツガルザリガニミズは津軽半島の一部に限産し、絶滅のおそれが極めて高いためAランクとした。干潟に生息するヤマトオサガニは青森県が北限の個体群で、生息地である干潟環境の悪化により絶滅が危惧される種類である。また、クモ目の2種、ミズグモとイソコモリグモは、それぞれ限られた池沼と砂地に生息が限定される種類で、ザトウムシ目の4種は分布記録が極めて少ないか特有の地理型により固有性の高い種類である。

陸・淡水産貝類で選定された種類は18種で、青森県レッドデータブック(2000)の9種から大幅に増加した。汽水種のタカホコシラトリはタイプ産地である鷹架沼の個体群はすでに絶滅し、現在は、周辺の小湿地にわずかに残っているのみである。青森県は、生物地理学上、多くの北方系種にとって本州での希少な分布地となっているが、中でも、移動性が低い陸産貝類では、離散的に固有の種となって定着する傾向が強い。絶対的な個体数が少ないという点も、陸産貝類の多くで絶滅のおそれを高める要因となっている。

選定された種類はいずれも移動能力が低く環境変化に敏感なことから、今後とも分布の縮小や絶滅が危惧される。青森県における陸域や淡水域、汽水域を取り巻く環境は基本的に改善されておらず、将来にわたる生存はますます危うくなっている。今回新たな種類が追加されたとはいえ、実際に県内に分布すると思われる無脊椎動物の数に比べると依然としてごくわずかにとどまっている。多様性の保全にあたっては、分類や分布に関する基礎的な情報の蓄積を進める必要がある。存在すら知られていない膨大な種類の無脊椎動物が県内に分布していることを考慮すると、保全にあたっては、群集の解明度が低い際にとるべき方策、つまり、生息環境そのものを保全するという意識が必要である。

(大高明史・大八木昭)

②本文

マルスダレガイ目 ニッコウガイ科

A

和名 タカホコシラトリ

環境省：該当なし

学名 *Macoma takahokoensis* Yamamoto et Habe

[形態的特徴] 貝殻は薄く、殻長1.5cm、殻高1cmほど、白色から淡紅色の小さな二枚貝である。本種は六ヶ所村鷹架沼で採集された個体に基づいて、1959年に新種記載された (Yamamoto & Habe, 1959)。分類学的特徴の1つとして、貝殻内面に残る外套膜の付着跡がバルチックシラトリガイ *Macoma balthica* と明らかに異なることが挙げられる。しかしながら、バルチックシラトリガイの亜種 *M. balthica takahokoensis* として扱われることもある。

[選定理由] 下北半島南東部の湖沼群にのみ見られる貴重な固有（亜）種である。鷹架沼では、近年の淡水化事業にともない当該個体群は消滅し、生息地が減少した。

[分布と生態の概要] 浅い湖底の砂の中に潜り込んでおり、人目につくことは少ない。

[生存に対する脅威と保存対策] 現在は、尾鮫沼および小川原湖周辺の小湿地に生息している。本種は淡水と海水とが入り交じる汽水域に生息するので、水質等の変化により消滅する可能性がある。学術的に貴重な固有個体群であり、保全のための生態解明が望まれる。

(武田哲)

ヒルミミズ目 ヒルミミズ科

A

和名 ツガルザリガニミミズ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Cirrodrilus tsugarensis* Gelder et Ohtaka

[形態的特徴] 体は円筒形で長さ1~2mm、後端に吸盤状の付着板を持つ。前端口節背側に11本の短い指状突起を持ち、顎板が背腹とも同形で、それぞれ、大きな1本の中央歯と小さな3対の側歯を持つ。

[選定理由] 分布が極めて限られており、宿主（ニホンザリガニ）個体群の消失に伴って絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 津軽半島北部のごく限られた河川に生息する (Gelder & Ohtaka, 2000; 大高, 2004)。ニホンザリガニの体表に共生し、尺取り虫のような動きで宿主の体表を移動する。宿主との関係など、詳しい生態はわかっていない。

[生存に対する脅威と保存対策] 分布域で宿主のニホンザリガニの生息を保証することが最も重要な課題である。生息場所が重複する外来のウチダザリガニが本種の生息域に入り込んだ場合、ウチダザリガニとの共生が知られている外来ヒルミミズ類との競合も危惧される。(大高明史)

ハウネンエビ目 キタハウネンエビ科

A

和名 キタハウネンエビ

環境省：該当なし

学名 *Drepanosurus uchidai* (Kikuchi)

[形態的特徴] 成体で体長20mm前後の、腹部にある11対の遊泳脚で腹部を上にして泳ぐ。やや遊泳力のある大型プラントンで、大型鰓脚類に分類されている。

[選定理由] 日本固有種で、北海道の石狩海岸地域と、むつ市に一つ、東通村に一つだけが知られている。近年、むつ市の場所は積雪量が少なく、発生しても、卵を残さず死んでいくものばかりである。東通村のものも積雪量の少なさは同様である。

[分布と生態の概要] 春になって積雪がとけて水がたまるような窪地に発生する。背泳ぎでゆっくりと泳ぐ。1か月ばかりの間に成体となって、交尾する。水たまりは初夏までには干上がって、成体は死ぬ。卵が残って休眠し、次の雪解け水が溜まるまでは発生しない。

[特記事項] 多くの積雪量がないと生きていけない。むつ市の場所は周りの杉林が大きくなって、積雪量が減少したことも原因である。両地区ともに積雪量の確保、または短期的にでも、水量の確保や補給をするなどの対策が必要と考えられる。(大八木昭)

**中腹足目 (ニナ目) イツマデガイ科 (カタヤマガイ科)****B**

和名 クビキレガイモドキ

環境省：該当なし

学名 *Cecina manchurica* A. Adams

[形態的特徴] 殻高7mm前後の暗黄褐色の巻貝であるが、殻頂が折れてなくなるので、クビキレの名がついている。

[選定理由] 全国的にも多いものではなく、分布が限られたものとなってきた。

[分布と生態の概要] 北陸以北、北海道の函館から稚内などの海岸の打ちあげられた海藻類などに見られる。河川や海岸線の改修にともなう海岸環境の変化と、漁網の利用で打ち上げられる海藻などの減少が生息に影響を与えたものと思われる。

[特記事項] 東北地方で、いつも見られるのは陸奥湾の芦崎ぐらいのものとなってきた。

(大八木昭)

**ヒルミミズ目 ヒルミミズ科****B**

和名 アオモリザリガニミミズ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cirrodrilus aomorensis* (Yamaguchi)

[形態的特徴] 外形はツガルザリガニミミズと似るが、口節背唇に長短が交互に並ぶ7本の指状突起を持ち、顎板の大きさが背腹で異なることで明瞭に区別される。

[選定理由] 宿主が本州のニホンザリガニに限られている。宿主の分布消失に伴って絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] ツガルザリガニミミズよりも分布が広く、県内に生息するニホンザリガニにはほぼ例外なく見られるほか、秋田県大館市や岩手県二戸市のニホンザリガニからも確認されている (Gelder & Ohtaka, 2000; 大高, 2004)。生態はよくわかっていない。

[生存に対する脅威と保存対策] 宿主であるニホンザリガニの生息を保証する清流の保全が望まれる。ツガルザリガニミミズと同様に、外来ザリガニの侵入に伴う外来ヒルミミズ類との競合も危惧される。

[特記事項] 七戸町と青森市 (旧浪岡町女鹿沢) 産の個体によって新種記載された種類で (Yamaguchi, 1934)、近年タイプ標本に対応すると思われる標本が見つかった (Gelder & Ohtaka, 2002)。

(大高明史)

**クモ目 ミズグモ科****B**

和名 ミズグモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Argyroneta aquatica* (Clerck)

[形態的特徴] 体長は10mm前後で、頭胸部は暗褐色から黒色、腹部は灰褐色または淡褐色。水中では、頭胸部はオレンジ色、腹部は空気に覆われて銀色に見える。

[選定理由] 全国的に確認事例が少なく、自然度の高い池沼が生息の条件である。

[分布と生態の概要] 水中生活をする唯一のクモで、ヨーロッパからアジアの冷涼な地域の池沼に分布する。生息場所の多くは泥炭地の池沼である。空気室を作る際には葉が糸状に密生した沈水植物が使われる。水生の小動物を捕らえて餌とする。県内では、1977年につがる市 (旧車力村) で初めて発見されて以来 (西川ら, 1977)、長く記録がなかったが、近年、つがる市で再確認され (工藤, 2005)、下北半島でも生息地が見つまっている (木下, 2007)。国内では他に、北海道・京都府・大分県・鹿児島県からの記録がある。

[生存に対する脅威と保存対策] 水生水草が豊富で自然状態がよく保たれた湿原や池沼が生息の条件で、魚類による捕食も大きな脅威になると考えられる。湿地環境の保全が急務である。

(大高明史)

無昆虫類以外動物の

**クモ目 コモリグモ科****B**

和名 イソコモリグモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lycosa ishikariana* (Saito)

**[形態的特徴]** 体長は雌が18～24mm、雄が10～20mmで、腹背は濃い灰色の地に3対の黒班があり、下面は全体黒色である。

**[選定理由]** 生息域が一部の海岸砂地に限定され、県内では分布域が極めて狭い。近年、砂浜の改変や汚染により本種の生息環境がさらに狭められている。

**[分布と生態の概要]** 北海道から島根県までの日本海側におもに分布する。県内では鱒ヶ沢から七里長浜にかけての海岸に分布し、太平洋側では例外的に八戸で見ついている。生息地は波打ち際より少し内陸側で、植物の根元や流木の傍に深さ10～20cm位の穴を掘って棲家としている。夜行性で昼間は穴に籠もり、夜間に出て活動し、小動物を餌とする。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種の生存には近年行われている防波堤建設、海水浴場開設など大規模な海岸改造など環境改変が脅威である。また、油汚染や固形漂流物等の堆積も問題で、それらの除去のため、大型機械により攪乱されることも生存を脅かす。

(水木隆治)

**エビ目 アメリカザリガニ科****B**

和名 ニホンザリガニ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cambaroides japonicus* (de Haan)

**[形態的特徴]** 清流に住む赤褐色ないし黒褐色のずんぐりとしたザリガニで、体長は40～60mm、まれに70mmを越える。頭胸甲は円筒形で額角は幅広く短い三角形。

**[選定理由]** 生息地の減少は顕著で、近年は山間の小河川や湧水地に離散的に見られるようになっている。青森県RDB(2000年)の出版以降に消失した生息地も多い。

**[分布と生態の概要]** 北海道と東北北部に生息する日本固有種で、本州での分布域は大部分が県内である。産卵は早春に行われ、抱卵期間は3～4か月に及ぶ。産卵するまで5年以上かかり、他のザリガニ類に比べると卵数が極めて少ない(川井・中田, 2001; Nakata *et al.*, 2002; 川井, 2007)。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 過去には薬や食料として乱獲された経緯がある。現在は、森林伐採や河川改修等に伴う生息地の改変、ペットとしての乱獲、汚濁水や農薬の流入などによる水質環境の悪化が主たる脅威となっている。県内ではまだ確認されていないが、生息場所が重複するウチダザリガニとの競合も危惧される。

(大高明史)

**ウズムシ綱三岐腸目 プラナリア科****C**

和名 トウホクコガタウズムシ

環境省：該当なし

学名 *Phagocata teshirogii* Ichikawa et Kawakatsu

本種は、弘前市の“御前水”で発見された日本固有種で、弘前が模式産地となっている学術的にも貴重な種である。県内以外では、山形県新庄市から記録されている（新村, 1988）が、分布は局所的である。現在、生息を確認しているのは弘前市内の湧水1か所のみであり、2008～2009年にかけて数回調査した結果では、数が少なく、1匹も発見できない時もあったので、希少種である。今後、湧水の枯渇、汚濁などが生ずると生存が危惧される。手代木（1974）によると、津軽半島（小泊付近）・下北半島・八甲田（猿倉温泉付近）の冷たくて清らかな泉や湧水・溪流にも局所的に低密度で分布しているが、近年再調査はされていない。

(石田幸子)

**ウズムシ綱三岐腸目 デンドロシーラ科****C**

和名 キタシロウズムシ

環境省：該当なし

学名 *Dendrocoelopsis lactea* Ichikawa et Okugawa

本種は、青森県が分布南限の日本固有種である。黒石市六万平一帯の小流に低密度で生息しているが、近年水枯れによって分布がせばめられ数も減ってきている。2009年6月の調査でも数が少なかった。手代木（1974）によると、津軽半島（小泊付近・梵珠山付近）・下北半島（湯野川温泉付近）にも局所的に低密度で生息しているが、近年再調査はされていない。県内以外には、礼文島天売島を含む北海道全域に分布していると報告されているが（Kawakatsu, 1969）、1998年礼文島・稚内・旭川・札幌を調査した際には、1匹も発見出来なかった。本種は、地質時代に北海道から移動してきたと考えられている（手代木, 1974）。

(石田幸子)

**原始腹足目（オキナエビス目） ヤマキサゴ科****C**

和名 ハコダテヤマキサゴ

環境省：該当なし

学名 *Hemipoma hakodadiense* (Hartmann)

殻径5mm前後のそろばん玉に似た形をした小型の陸貝で、北海道および本県と秋田県の高山に分布する北方系のものである。環境省は、下北半島に生息するものを、絶滅のおそれのある地域個体群LPとしてランク付けしている。東通村の石灰岩産地の桑畑山には以前はよく見られたが近年はあまり見られない。下北半島のブナ林の林床にも生息している。津軽半島の山中でも見つかっている。

(大八木昭)

**柄眼目 キセルガイ科****C**

和名 エゾコギセル

環境省：該当なし

学名 *Pictophaedusa monelasmus* (Pilsbly)

蝦夷の小さなキセルガイという名で、煙草を吸うときにつかったキセルに見たてている。自然のよく残された森林にすむ殻高10mm前後の北方系のものである。北海道と本県と秋田県の高山にも分布している。県内では下北半島の山地で生息のほか、近年になって八甲田山地・津軽半島・赤石川流域でわずかながら確認されている。太い広葉樹があるところでないと思つからない。樹皮上で生活しているため、大きな木が切られるとすみかを失うことになる。

(大八木昭)

**柄眼目 オナジマイマイ科****C**

和名 ミチノクマイマイ

環境省：該当なし

学名 *Euhadra decorata gratoides* Kira

殻のとがった方を上にして殻の開口をみたとき、殻口が左側にくるのを左巻きという。殻径24mm前後の左巻きのマイマイで、白地で無帯のものと白地に茶褐色の色帯があるものがある。ヒダリマキマイマイ種群は近畿東部より北に分布しているが、その中でも最西北端に生息する種である。秋田県と本県の日本海側に分布している。内陸部にはあまり入り込まないと思われるが、岩木山や梵珠山などにも点在するようである。

(大八木昭)

**異歯目 カワシンジュガイ科****C**

和名 カワシンジュガイ

環境省：該当なし

学名 *Margaritifera laevis* (Haas)

本県では川内川の支流・本川・田名部川などの、やや砂地の川底に、突っ立った状態で生息する殻長80mm前後の二枚貝である。普通の個体には真珠はできない。グロキディウム幼生はマス科魚類に付着して生活し、分布を広げる。現在、川内ダムにより、水生生物の上流と下流のいききができなくなっており、水生生物相が変化して、本種の生息に影響が現れる心配がある。野平地区の大利家戸川はかなりのカワシンジュガイの生息沢であったが、道路拡幅舗装工事で壊滅状態にある。

(大八木昭)

**エビ目 サワガニ科****C**

和名 サワガニ

環境省：該当なし

学名 *Geothelphusa dehaani* (White)

甲幅が2～3cmの純淡水産のカニで、本県が分布の北限にあたる。県内での密度は、南西日本に比べてもともと少ない。分布域は県内のほぼ全域にわたり、津軽半島ではかなり普通に見られる。一方、下北半島での記録はごくわずかである。主に河川上流の礫や小石の多い清流に生息するが、海岸近くの勾配が急な小河川でも見られ、さらに湿地や湖沼沿岸部に生息する場合もある。都市化や河川工事等に伴う生息地の改変や、水質の悪化により生息地は近年急速に減少している。

本種は地域集団間で体色変異が著しく、これらの間では遺伝的分化も認められている。県内の個体群は、甲皮・鉗脚・歩脚ともに黒褐色か暗緑色または暗紫色のタイプである（一寸木, 1980）。

(大高明史)

**中腹足目 (ニナ目) エゾマメタニシ科 D**

和名 エゾマメタニシ

学名 *Bithynia moltschanovi* Lindholm

環境省：該当なし

殻高8mm殻径6mm前後の小さなタニシ形で、北海道東部の釧路湿原や塘路湖あたりで記録されているようであるが、本県の小川原湖にもいる。海外ではシベリアあたりに分布する北方系の種である。

(大八木昭)

**中腹足目 (ニナ目) ミズシタダミ科 D**

和名 ミズシタダミ

学名 *Valvata hokkaidoensis* Miyadi

環境省：該当なし

殻径3.5mm前後の平巻状の淡水貝で、本県・北海道、中国北部・シベリアなどに分布する北方系のものである。本州では下北半島の沼に生息することが知られている。浅い湖などの底に住み、底質や水生植物の好みはないようであるが、下北半島の沼では、水生植物の生えていないところに見られる。水の流入あるいは流出水路の乏しい浅い沼なので周辺から供給される水質の悪化が生息に影響すると考えられる。

数年前、三つしか知られていない、生息沼のひとつである、むつ市の長沼が側溝排水工事の結果、水の供給が止まり、ミズシタダミとともに水生生物がすべて死滅した。

(大八木昭)

**中腹足目 (ニナ目) ミズシタダミ科 D**

和名 ニホンミズシタダミ

学名 *Cincinna japonica* (Martens)

環境省：該当なし

殻径7mm殻高4mm前後の、やや腰高の平巻貝で北方系依存種である。北海道、本州の神奈川県での記録がある。県内では小川原湖でも生息が確認されている。神奈川県の大井町では水深25~30mの深場にも生息するといわれているので、本県でも精査の必要性があるといえる。

(大八木昭)

**中腹足目 (ニナ目) ミズゴマツボ科 D**

和名 エゾミズゴマツボ

学名 *Stenothyra recondita* Lindholm

環境省：該当なし

殻高5mm前後の卵形の巻貝で、朝鮮半島や北海道に分布する北方系のゴマツボである。県内では鷹架沼などの湖沼で確認されている。どこも水の放流域はやや汽水的な環境にあるが、そこからは離れたところで見つかっている。

(大八木昭)

**中腹足目(ニナ目) イツマデガイ科 (カタヤマガイ科) D**

和名 イツマデガイ

学名 *Blanfordia japonica japonica* (A. Adams)

環境省：該当なし

殻高10mm、殻径5mm前後で殻のやや固い陸産巻貝で、東通村尻屋の石灰岩地帯の化石の中にたくさん出てきたが、尻屋では現生のイツマデガイは見つかることなく、やや離れた恐山山系で確認されたという経緯がある。北海道南部から佐渡・福井県に分布するといわれている。ただし、恐山山系で確認されたものは、別亜種のオカマメタニシ *Blanfordia japonica bensoni* の誤同定の可能性もあるので、精査を要するところである。オカマメタニシにしても希少種であり、RDB掲載種となる。

(大八木昭)

**基眼目(モノアラガイ目) モノアラガイ科 D**

和名 コシダカヒメモノアラガイ

学名 *Galba truncatula* (Müller)

環境省：該当なし

殻高11mm前後でモノアラガイに比べるとかなり小型種である。ヨーロッパ原産の外来種と考えられるというが、在来種説も否定できない種である。むつ市の川内や脇野沢の山の中で雪解け水や湧水にすむ、コシダカヒメモノアラガイは外来種とは考えにくいところがある。モノアラガイよりも環境適応能力が高いかもしれないが、個体数は多くはない。

(大八木昭)

**基眼目(モノアラガイ目) ヒラマキガイ科 D**

和名 ヒダリマキモノアラガイ

学名 *Culmenella rezuoji* (Lindholm)

環境省：該当なし

殻高6mm前後の左巻き淡水貝で、本県や長崎県など数県にしか生息が知られていない。県内では津軽半島の山中の沼、下北半島の数か所の沼などに生息している。水底の堆積した落ち葉などに付着している。津軽半島の沼は県の自然環境保全地域に指定されているが、金魚などがもちこまれており、生息環境が変化してきている。この種は生息地から突然消滅する傾向があるといわれている。ある程度汚れた池沼にもすめるモノアラガイとは異なり、水質の変化に敏感なようである。

(大八木昭)

**基眼目(モノアラガイ目) ヒラマキガイ科 D**

和名 ミズコハクガイ

学名 *Gyraulus soritai* Habe

環境省：該当なし

殻径4mm前後の平巻き淡水貝で浅いところでは水底の古い枯れ葉などにくっついていることがある。関東や北陸以西に分布するといわれていたがむつ市や東通村で生息が確認されている。東通村ではミズコハクガイとヒダリマキモノアラガイが同水域に生息しているところがある。しかし、農業用水として水位の調節が人工的に行われており、四季の自然状態の水位変化とかけ離れた満水渇水変化が水生生物や淡水貝類に与える悪影響はかなりのものと思われる。

(大八木昭)

**柄眼目(マイマイ目) キバサナギガイ科 D**

和名 ナタネキバサナギガイ

学名 *Vertigo eogea eogea* Pilsbly

環境省：該当なし

殻高3mm、殻径1.8mm前後のよくふくらんだ陸産巻貝である。口に牙状のものがある。湿地性の草本についているが、小さくて、季節によっては姿が全く見えず、きわめて探しにくい種である。個体の小ささなどから、生息していても気づかない事が十分考えられるが、個体数も多いとは思えない。県内では東通村の沼の岸辺で確認されただけである。今後の調査が待たれる。

(大八木昭)

**基眼目(モノアラガイ目) ヒラマキガイ科 D**

和名 カワネジガイ

学名 *Camptoceras hirasei* Walker

環境省：該当なし

殻高6mm前後で10mmに達する。殻は左巻きでゆるく巻き、細長いねじれた角笛のようであるがヒラマキガイ科である。本州では6県に分布しているが各地で姿を消している。むつ市の水田用水路で確認されているが、小さいこともあり他ではなかなか見つからない。全国的に水質の悪化と生息地の改修工事などで消滅していく種である。見つかったむつ市の用水路も下流域はコンクリート水路化がなされ、農業形態と流入水の変化から個体の確認も容易なものではなくなる様子である。

(大八木昭)

**柄眼目(マイマイ目) キバサナギガイ科 D**

和名 ナガナタネガイ

学名 *Collumella edentula* (Draparnaud)

環境省：該当なし

殻高2.1mm殻径0.6mmくらいのやや細長い巻貝である。北海道や兵庫県で記録されているが、県内ではむつ市や東通村の山中で確認されている。個体数は多いとは思われないが、小さいので見つからないことも十分考えられる。今後の精査を期待する。本州のナガナタネガイは環境省のRDBでは絶滅のおそれのある地域個体群LPに掲載されている。

(大八木昭)

**柄眼目(マイマイ目) オナジマイマイ科 D**

和名 ブドウマイマイ

学名 *Ezohelix gainesi gainesi* (Pilsbly)

環境省：該当なし

殻高26mm殻径30mm前後の殻のうすくもろい黒緑色のエゾマイマイの一種である。北海道中部、東北の高山帯に生息するが、県内では八甲田山系で記録されている。個体数は多いとは思えない。環境省のRDBでは本州のエゾマイマイを絶滅のおそれのある地域個体群LPとしている。

(大八木昭)



**マルスダレガイ目 ドブシジミ科****D**

和名 エゾドブシジミ

学名 *Sphaerium miyadaii* Mori

環境省：該当なし

殻長10mm前後の小さな汚白色の二枚貝で、殻頂部（胎殻）は特に大きくふくれあがって他の部分と明らかに区別できるのが特徴である。北海道に生息するが、東通村の牧場内の浅い泥池沼で生息が記録されている。そこは環境変化の著しいところなので、生息が危ぶまれている。

(大八木昭)

**ザトウムシ目 カワザトウムシ科****D**

和名 オオナガザトウムシ

学名 *Melanopa grandis* Roewer

環境省：該当なし

体長約10mm。体は長めで全体が黒褐色。腹部第2背板に1本の棘がある。日本では対馬・九州北部・四国西部・本州の日本海側から北海道函館まで分布するが外部形態の地理変異が著しく、東北地方では生息確認地が希薄になり、県内では浅虫周辺の2か所で確認されているのみ（本州型に属するがやや小型）である（Suzuki & Tsurusaki, 1983）。年1化卵越冬で成体は7～10月頃にみられる。

(鶴崎展巨)

**ザトウムシ目 カワザトウムシ科****D**

和名 ヒトハリザトウムシ

学名 *Psathyropus tenuipes* L. Koch

環境省：準絶滅危惧

体長約6mm内外。腹部第2背板に短い棘がある。九州以北の日本全土の海岸と河川感潮域のヨシ原などに生息する。東北地方以北では内陸にも出現するが、林内には入らない。県内でも生息地は河川改修や人工護岸で減少しているおそれがある。B染色体という特殊な染色体の数に地理的変異があるが（Tsurusaki & Shimada, 2004）、県内の集団は未調査。年1化卵越冬で成体は7～10月頃まで見られる。

(鶴崎展巨)

**ザトウムシ目 カワザトウムシ科****D**

和名 フタコブザトウムシ

学名 *Paraumbogrella pumilio* (Karsch)

環境省：該当なし

体長約3mm。体は全体が茶から黒褐色、腹部第1、2背板に低いこぶ状突起がある。鳥取県以北の本州と北海道に分布する日本固有種。県内ではむつ市恐山で確認されているのみ。河川敷の石下・草地・二次林の林縁など、比較的明るい環境の地表に生息する。幼体は5月頃に出現、夏の終わりに成体となりそのまま越冬する。越冬成体は夏頃まで生き残るので成体はほぼ周年見られる（Tsurusaki, 2003）。

(鶴崎展巨)

**十脚目 スナガニ科****D**

和名 アリアケモドキ

学名 *Deiratonotus cristatus* De Man

環境省：該当なし

本種は少し横長の甲羅を持ち、その幅が最大で15mmほどに達するカニである。近年北海道の日本海側でも発見され、九州まで広く分布することが明らかになったものの、その記録は多くはない。県内では、むつ市芦崎・六ヶ所村鷹架沼および高瀬川河口・平内町浅所を得られており、陸奥湾内と太平洋岸の河口に分布する。

(武田哲)

**触手動物門 アユミコケムシ科****D**

和名 アユミコケムシ

学名 *Cristatella mucedo* Cuvier

環境省：情報不足

長さが数cmから十数cm、幅が5mm程度の細長い群体を作り、ゆっくりと移動する。北半球の寒冷地に広く分布し、国内では本州中部以北で記録されているが、いずれの生息地でも近年は減少している。県内では、過去につがる市（旧森田村）の狄ヶ館溜池からの記録がある（Toriumi, 1941）。2006年に狄ヶ館溜池に近い屏風山湖沼群の冷水沼から本種の休芽が見つかったが、生体は確認されていない（大高ら, 2008）。

(大高明史)

和名 シモキタシブキツボ

環境省：該当なし

学名 *Fukuia ooyagii* Minato

[形態的特徴] 殻径6mm前後の緑褐色の巻貝で水中やしぶきのあたる陸にすむ。

[選定理由] 分布は山地に点々としているが、森林の伐採や山林道路工事などで沢が分断されたり、破壊されたりで生息地が減少している。

[分布と生態の概要] 下北半島の山地で、湧水や小さな沢水の流れ出るところに生息する。枯れかけた植物体や落ち葉などを食べる。

[特記事項] 近似種は福井県・新潟県・秋田県など日本海側に見られるが、小型で、シブキツボとしてはいちばん北に分布し、いちばん水中にも適応しているようである。東通村のものが1982年に新亜種として発表された。

(大八木昭)

和名 ナンブマイマイ

環境省：該当なし

学名 *Euhadra decorata diminuta* Toba et Kuroda

[形態的特徴] 殻高19mm、殻径30mm前後の丈夫な殻で、殻表面のすじの美しい左巻きのマイマイである。

[選定理由] ムツヒダリマキマイマイ種群の中で東北端に生息する種で、岩手県と本県にまれに生息するとされている。

[分布と生態の概要] 本県のものはやや扁平で、東通村の石灰岩地帯に分布している。その中でも分布範囲は限られており、アオモリマイマイが多く見られるところには分布していない。

[特記事項] 分布地が限られている上、生息個体数も多いとは思われない。

(大八木昭)

和名 ササミケマイマイ

環境省：該当なし

学名 *Aegista kunimiensis* M. Azumma et Y. Azuma

[形態的特徴] 殻径9mm前後のマイマイで殻の表面に鱗状の毛羽立ちがある仲間なのでケマイマイとよんでいる。長い触角があるところが頭部で、そこに頭瘤という瘤が目立つ。

[選定理由] 分布が限られており、自然度の高いところに生息している。

[分布と生態の概要] 岩手県の国見温泉のササのはえたところから発見されたのでこのような名前になった。ブナなど広葉樹林の笹やぶで風倒木などがある場所に見られている。

半腐生の植物を食べているのではないかと考えられる。

[特記事項] 県内では八甲田山中で確認した。その後、福島県・茨城県でも発見された。生息個体数が多いとは思われない。

(大八木昭)

和名 トウホクスベザトウムシ

環境省：該当なし

学名 *Leiobunum tohokuense* Suzuki

[形態的特徴] 体長約6mm内外。体は黄橙色ないし橙色。雄は全体が橙色でよく目立つ。

[選定理由] 県内に交尾器や染色体数の異なる2地理型が見られ、移行帯の存在が予想される。

[分布と生態の概要] 栃木県北部以北の本州の固有種。森林に生息し県内では低地から1,000mを超える山地まで広範囲に見られる。形態や染色体数に地理的分化が見られ県内では南西部（岩木山・白神山地・十和田湖）には十和田型（ $2n=20$ ）、北東部（津軽半島・浅虫・下北半島）には浅虫型（ $2n=22$ ）が見られる（Tsurusaki, 1990）。県西部では津軽平野が両者の分布域を分けているように見えるが、染色体数に関しては弘前市南部の藍内で両者の移行集団が見つまっている。年1化卵越冬で、成体は7月初旬～10月上旬くらいまで、林内の樹幹や灌木上に見られる。

[生存に対する脅威と保存対策] 主要生息地はブナ林であるが、適度な湿度が保たれた一定規模の森林であればスギなどの人工林にも生息する。県内では正確な位置がまだ特定されていないが、上述の弘前市藍内を含み浅虫型と十和田型の双方の分布の接触域にあると予想される交雑帯（通常、幅は数km以内）は貴重であるので、生息地となる樹林地の保全に配慮が望まれる。

（鶴崎展巨）

和名 ヤマトオサガニ

環境省：該当なし

学名 *Macrophthalmus japonicus* (De Haan)

[形態的特徴] 本種は横長の甲羅を持つ黒っぽいカニで、その幅は最大で40mmほどになる。他地域の個体群よりも大きく成長する、甲羅の幅に対する長さの比が大きくなるという特徴を有する特異な個体群である（Wada, 1991）。

[選定理由] 平内町浅所およびむつ市芦崎の海水と淡水が混合する、限られたごく狭い範囲にのみ見られる。生物地理学上も重要な個体群であることを考慮し、LPランクに選定した。

[分布と生態の概要] 日本では青森県から鹿児島県まで、また黄海周辺にも分布している（Wada, 1991）。県内では上記2か所の小石の混じる泥質干潟に生息している。およそ300km南下した宮城県北上川河口の個体群が地理的にもっとも近く、県内の個体群は大きく孤立している。泥の中に細長い巣穴を作り、干潮時に巣穴の周りで活動をする。

[生存に対する脅威と保存対策] 河川改修等により水質、あるいは底質環境が変化すれば消滅する可能性がある。保全のため、生活史解明を含めた生態研究が望まれる。

（武田哲）

### ③引用文献

- Gelder, S. R. and A. Ohtaka 2000. Description of a new species and a redescription of *Cirrodrilus aomoriensis* (Yamaguchi, 1934) with a detailed distribution of the branchiobdellidans (Annelida: Clitellata) in northern Honshu, Japan. Proc. Biol. Soc. Washington, 113: 633-645.
- Gelder, S. R. and A. Ohtaka 2002. A review of the orietnal branchiobdellidans (Annelida: Clitellata) with reference to the rediscovered slide collection of Prof. Hideji Yamaguchi. Species Diversity, 7: 333-344.
- 一寸木肇 1980. 本州北部におけるサワガニ *Geothelphusa dehaani* (White) の体色変異について. 甲殻類の研究, 10: 57-60.
- 川井唯史 2007. ザリガニの博物誌. 里川学入門. 東海大学出版会, 東京. 166pp.
- 川井唯史・中田和義 2001. ニホンザリガニの生態(総説). 青森自然誌研究, 6: 1-8.
- Kawakatsu, M. 1969. An illustrated list of Japanese freshwater planarians in color. Bull. Fuji Women's Coll., 7, Ser. II: 45-91.
- 木下哲夫 2007. 下北半島・自然観察ノート(天野光・木下哲夫・大八木昭編). 自然学校エコーロジ. 159pp.
- 工藤周二 2005. ミズグモの記録. Cellastrina, 40: 32.
- Nakata, K., T. Hamano, K. Hayashi and T. Kawai 2002. Lethal limits of high temperature for two crayfishes, the native species *Cambaroides japonicus* and the alien species *Pacifastacus leniusculus* in Japan. Fish. Sci., 68: 763-767.
- 新村文男 1988. 淡水生プラナリア, トウホクコガタウズムシ *Phagocata teshirogii* の新生息地について. 信濃生物学会会報“信濃路”, 45: 5-7.
- 西川喜朗・桂孝次郎・道盛正樹 1977. ミズグモ青森県に健在. Atypus, 70: 13-14.
- 大高史 2004. ザリガニの体表で暮らすヒルミミズーその分布と生態. うみうし通信, 42: 2-4.
- 大高史・小笠原嵩輝・木村直哉・小林 貞・谷田一三・上西 実・安倍 弘・富川 光・櫛田俊明 2008. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. Cellastrina, 43: 49-78.
- Suzuki, S. and N. Tsurusaki 1983. Opilionid fauna of Hokkaido and its adjacent areas. J. Fac. Sci., Hokkaido Univ., Ser. VI, Zool., 23: 195-243.
- 手代木 渉 1974. プラキストン線とプラナリア. 動物と自然, 4(3/4): 2-7.
- Toriumi, M. 1941. Studies on freshwater Bryozoa of Japan. I. Sci. Rep. Tohoku Univ. Ser. IV, (Biology), 16: 193-215.
- Tsurusaki, N. 1990. Taxonomic revision of the *Leiobunum curvipalpe* group (Arachnida, Opiliones, Phalangidae), III. *Leiobunum curvipalpe* subgroup. Jpn. J. Ent., 58: 761-780.
- Tsurusaki, N. 2003. Phenology and biology of harvestmen in and near Sapporo, Hokkaido, Japan, with some taxonomical notes on *Nelima suzukii* n. sp. and allies (Arachnida: Opiliones). Acta Arachnol., 52: 5-24.
- Tsurusaki, N. and T. Shimada 2004. Geographic and seasonal variations of the number of B chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida: Opiliones). Cytogenet. Genome Res., 106: 365-375.
- Wada, K. 1991. Biogeographic patterns in waving display, and body size and proportions of *Macrophthalmus japonicus* species complex (Crustacea: Brachyura: Ocypodidae). Zool. Sci., 8: 135-146.
- Yamaguchi, H. 1934. Studies on Japanese Branchiobdellidae with some revisions on the classification. J. Fac. Sci., Hokkaido Univ., Ser. VI, Zool., 3: 177-219.
- Yamamoto, G. and T. Habe 1959. Fauna of shell-bearing mollusks in Mutsu Bay Lamellibranchia (2). Bull. Mar. Biol. St. Asamushi, Tohoku Univ., 9 (3): 85-122.